一橋論叢　第三十五巻　第四號

理論經濟學

——シュムペーター著『經濟分析の歴史』の紹介を通じて——

山田雄三

一　問題

理論經濟學を專攻しようとする讀者に對し、私はここで「經濟分析」なるものの意義について考えることをすすめたいと思う。分析という言葉はよく使われているが、その意義については必ずしも正しく理解されていないようである。分析ということは物事をバラバラに分解することで、生きた現實を殺してしまうものだと、反對する人がいる。これによつて一般に科學そのものに不信をいだくのは極端に過ぎるが、そこまで至らないとしても、理論的分析に對抗して歴史的直觀を强調し、價値判斷の導入を力說することは、とくに社會科學において、しばしば見られるところである。もちろん正しい解決の途は、科學的分析又は理論的分析にその所を與えるということであろう。歴史や政策を輕視することでもなければ、さらに科學以外の藝術や宗教というようなものすらも排斥すべきではないであろう。科學的分析には科學的精神ともいうべきものが伴うことも忘れてはならない。たとえば經驗的事實の前にはあくまで頭を下げるとか、囚われざる探求にどこまでも精進するとか、そういう精神面も正しく認められなければならない。かかる科學的精神からいって、分析をいたずらに過大に評價すること

も、また、過小に評價することも、あってはならない。分析と直觀、分析と行動、そういういろいろな關係も科學的分析の意義を正しく認めようとする人々にとって、十分反省されなければならない。そこにはもとより種々究明すべき論點があるであろう。しかしいずれにせよ、理論經濟學へ關心をよせるにあたって、經濟分析なるものの意義をつかんでおくことは大切なことである。

この問題についてここで私は一つの指導的文獻としてシュムペーターの遺著『經濟分析の歴史』Joseph A. Schumpeter: History of Economic Analysis, N. Y. 1954 を推奨したいと思う。この書は千二百ページにわたる尨大な學説史であり、そのとり扱う範圍も古代から最近時に至る極めて廣汎なものであるが、いま學説史の部分をしばらくおき、その第一編の序論だけを讀んでもよい。それは原文で僅か五十ページに足らない部分であるが、「經濟分析」の意義をつかむ上にたしかに暗示に富む明快な文章たるを失わない。この書の表題そのものが示しているように、シュムペーターは經濟分析を中心として經濟學の發展を考えようとするものであり、そこには經濟學における科學的分析、もしくはやや狹く理論的分析の意義がその背景との關連において明確につかまれている。私はここでいまその紹介を通じて理論經濟學への一つの手引きを與えて見たいのである。

最近、東畑精一教授により邦譯第一卷が刊行された。邦譯では全七卷を豫定されているようであり、われわれはこの譯業の完成を心から期待しているものであるが、いまここで主として問題にしようとする第一編序論は既刊の第一卷に收められているのであって、讀者の熟讀を是非おすすめしたい。

シュムペーターの書物の紹介を通じて理論經濟學への手引きを與えるということは、恐らく本誌編集者の注文に添わないかも知れない。ここで若干辯解の辭を述べることを許されたい。

もし編集者の注文が理論經濟學の入門のために初步的な數冊の文獻をとりあげて解説することを要求するとすれば、ここでシュムペーターの初步的ならざる一冊の書物だけをとりあげることは、たしかに適切な處置ではないであろう。シュムペーターの書物は明らかに入門書というべきものではない。だが、すでに專門科目として理

論經濟學を學ぼうとする讀者を念頭におくことがここで許されるならば、入門書の羅列はむしろ退屈であろう。この段階の讀者にとっては、學問の體系を與えられたままに學ぶというのではなく、自ら考え自ら探求するのでなければならない。そこでは、われわれの思考を眞に促進するような指導的文獻が與えられなければならない。この種の文獻を讀むには、すでに或る程度の準備的知識が必要であることはいうまでもないし、讀んでいく過程においても絶えず知識の不足を感ぜしめるであろう。しかしそういう努力の間に、われわれ自身の思考を根底からゆり動かすものこそ、眞の指導的文獻であろう。シュムペーターのこの書はそういう文獻としてここでとりあげられるのである。

それにしても、編集者の注文に答えるためには、せめて專門的指導書の選び方ぐらいは述べなければならないかも知れない。しかし、私は過去の自分の經驗をふりかえって見て、このような注文にそのまま答える勇氣をもたないのである。私の考えるところでは、すでに專門的段階にあっては、むしろ自ら迷いながら途を切り開いていく以外に、適切な方法はないと思っている。指導的文獻の選び方にもいろいろな方向は考えられるであろうが、一つの方向をたどるだけで滿足できるものではない。アダム・スミスやマルクスのごとき古典的文獻を讀むことももとより大切であるが、しかしその後の新しい動きも知らなければ、いたずらに骨董品を弄ぶこととなろう。そうかといって、ヒックスやカレツキのごとき現代一流の文獻に接しても、これまでの問題の發展を知らなければ、いたずらに新奇を追うのみとなろう。さらに轉じて學說史的な優れた文獻を選び、全體の學說史的流れを學ぼうとしても、一々の學說の理解が或る程度なければ、その眞意はつかめないであろう。こうして古いものと新しいものとの間を、また全體と個々との間を、幾たびも行きつ戻りつしながら、見通しのつくまでは、無駄もあり迷いもあるというのが常なのである。指導的文獻の選び方にはっきりした順序があるわけではない。この意味において、ここでシュムペーターをとりあげるのも、いろいろ考えられるもののうちの單に一つの選擇を示すに過ぎないことを承知していただきたい。

前に述べた通り、シュムペーターのこの書は經濟學において經濟分析なるものがどのように發展してきたかをとり扱う學說史であるが、同時に經濟分析を中心とする方法論的な書物なのである。經濟分析の基盤たる科學的方法とはそもそも何か、そこにはどのようにしていろいろの分科が生ずるか、それらの分科の間にはどのような關連が考えらるべきか、そういう點を深く反省しているのであって、したがって理論的分析だけではなく、それと歷史や統計や政策などとの交渉をもいろいろと考察している。かかる基礎的な方法論は經濟學を專攻するにあたってたしかに缺くべからざる課題であろう。もちろんここでもこのような方法論から讀み始めるのが最もよいという理由はない。むしろ絕えず經濟學の內容に降りていってのみ方法論も活きてくることを知らなければならない。したがつてシュムペーター自身の多くの經濟學上の業績を離れていきなりシュムペーターのこの書を指摘するのも危險でさえあるだろう。

要するに私は、專門科目を學ぼうとする讀者を念頭において、いかにももっともらしく經濟學の學び方やその順序などを述べ立てることに氣がすすまないので、編集者の注文には直接添わないかも知らないが、ここでシュムペーターを通じて「經濟分析」の意義を考えるという一つの問題を提出したいと思うのである。

二　廣義の經濟分析

すべて科學的ということを分析的と解すれば、經濟理論のみならず、經濟史の如きも科學的である限り分析的であるといわねばなるまい。たしかに經濟史についても假設ということが語られるし、型の論理的構成も必要であって、假設や型は明らかに分析的立場から生れるのである。普通には經濟分析といえば直ちに理論の領域が考えられ、均衡分析とか動態分析とか呼ばれているようなものがとりあげられるであろうが、われわれはいま狹く理論的＝分析的ということを考える前に、やや廣く科學的＝分析的ということから考察したいと思う。

シュムペーターは前揭書の第一編第一章に「經濟學は科學であるか」という一節を設けているし、さらに第二章の「經濟分析の技術」において歷史・統計・理論など

とならべて論じているが、そこでは廣い意味での科學的＝分析的ということが問題であった。歴史も統計も理論も、これらが科學としての經濟學に包含される限り、いずれも等しく科學的方法に從うものであることはいうまでもない。シュムペーターによると、科學的知識とは「道具化された知識」tooled knowledge といわれる。ここで「道具化」というのは、普通の言葉でいえば、特定の「専門的な技法（テクニークス）」をもつということであり、これによって専門的な科學的知識が一般の常識と區別されるのである。特定な専門的な技法とは何かというに、一つは事實を發見する場合の實驗・觀察・調査などにつき特殊の發展を遂げてきた方法ということであり、他はこれらの事實を體系化する場合の假定・推理・解釋などにつきやはり特殊の發展を遂げてきた方法ということである。一つは實證的に資料を集聚するという面であり、他は論理的に形式化を行うという面である。これら二つの面のそれぞれの專門的技法にもとづいて獲得される知識が科學的知識なのである。シュムペーターが "A science is any field of knowledge that has developed specialized techniques of fact-finding and of interpretation or inference" (p.7) といっているのは以上のように解されるであろう。

ところで科學的知識においては資料面と形式面とは互に結びつくべきものである。資料を集めるだけで形式化が行われなければ料學的知識とはいえないし、形式化が資料に對應するのでなければやはり科學的知識ではない。數學や論理學はもっぱら形式そのものの體系を展開するのであろうが、經驗科學における知識にあっては形式面と資料面とが結合するのでなければならない。いわゆる理論は形式面に重點をおくけれども、資料による檢證を無視するものではないし、また歴史や統計は資料面に重點をおくけれども、形式的な假設とか類型とかを否定するものではない。然らば何故理論と歴史という分科が生ずるか。シュムペーターは巧みな譬喩をもって答えている。すなわち、理論は標準の型を定めてつくる既製服に似ており、歴史は客のからだの寸法を一々測ってつくる注文服に似ているというのである。（この例はシュムペーターの『理論經濟學の本質と主要内容』邦譯五一三頁

に詳しく述べられているものであるが、こんどの書物では p. 15 の脚註にポアンカレの句を引用して簡單に觸れている。）既製服は個々の客のからだに合わせてはいないが、しかし十分賣れるだけの一定の標準型が豫定されるのである。つまり理論的形式化は一々の觀察に訴えないが、しかし觀察に役立つものとして或る形式が樹立されるのである。これに反し歷史においては、ここでも形式的な假設というべきものを必要とするが、しかし結局は資料の結果を忠實に具現することが目的であって、理論的な假設が假設それ自體意味あるものとして樹立されるのと區別される。シュムペーターが理論的な假設を歷史的な假設と區別して、"They differ from the hypotheses of the first kind in that they do not *embody* final results of research, but are mere instruments or tools framed for the purpose of *establishing* interesting results" (p. 15) といっているのは、そういう意味であろう。この句で"mere instruments or tools"というのは、資料に訴えることを離れて單に形式的に前提と結論との論理的關係自體に意味を認めることを指すのであろう。だから前に科學的知識が"tooled knowledge"だという場合のツールが賃料集聚の技法をも含めているのに對していうと、ここでは形式面のツールのみをとり出していると解される。さらに、理論といっても經驗科學的な理論である限り、觀察と全く引き離して形式だけを問うものではないが、ここでは一應形式面だけを離して、單なるツールといっていると解される。シュムペーターは同じことをまたジョン・ロビンスン夫人の用語を借りて「道具箱」box of tools という言葉も使っているのであるが、要するに理論というのは、形式面と資料面との結合について一應形式面に重點をおき、資料集聚の前に豫め構成されるところの形式的な道具立てをいうのである。

もちろんそれだけでは理論と歷史との對立は十分に說明されないであろう。進んで資料面と形式面とのいずれかが强調されるのはどうしてであるかが說明されねばならない。シュムペーターによれば、歷史が必要なのは、經濟學の對象たるものが本質的に歷史的事實であるからであるが、さらに進んで歷史においては純粹に經濟的な

ものと然らざるものとの關連を最もよく理解せしめるからである。歴史においては個別的事實の特質の理解が尊重され、したがって經驗的なものと非經濟的なものとを無理に引き離すことを拒むのである。そのためにこそ、資料を忠實に集聚するところの歴史と呼ばるべき專門的技法の精練が要求されるのである。ところでこのことは理論が不可能であるとか無意味であるとかいうことを意味するものではない。理論においては、純粋に經濟的なものがとり出され、しかもその働きを一般的に究明しようとする。經濟的なものの理解を缺いては、經濟的なものと非經濟的なものとの交渉も理解し得ない。理論においてはたとえば貨幣とか價格とかいうものを、時處的に制約された姿においてではなく、一般にそれらがどういう經濟的な作用を營むかを條件と結果との關連において明確にすることが求められる。個別的な事實においては經濟そのもの作用は政治的・社會的條件と密接にくっついて純粋には現われないが、これを無理にも引き離して一般的に理解しておかなければ、たとえば中世の都市經濟が經濟そのものとしてどんな意味をもっているかも正しく理解し得ないことになるのであって、この意味でシュムペーターのいうごとく(p. 13 の譯註)、經濟史自ら理論の助力を必要とする面があるのである。

いま歴史についていったのと似たことは統計についてもいえる。統計は古くから經濟學のうちに導入された技術であるが、經濟學者としては統計的數字の集聚や解釋の仕方に關する統計的方法なるものを身につけねばならず、それは理論とならぶ一つの經濟分析の分野なのである。さらにシュムペーターはこれらの他に「經濟社會學」economic sociology, Wirtschaftssoziologie なるものを附け加えている。これは、非經濟的なものにも關心をよせる歴史とやや共通したところをもつのであるが、シュムペーターによると、そこでは經濟を廣く社會制度を包括するものと解し、むしろ經濟行動そのものよりも經濟行動をとるに至らしめる社會的地盤が何であるかという問題をとり扱うものであって、これまで廣く經濟學のもとに專門家が迫ろうとした樣々の問題領域を顧みると、この「經濟社會學」の問題も廣義の經濟分析の一分野と認めることが適當であると、シュムペーターは

いうのである。

以上によって經濟分析は極めて廣義に解釋されている。およそ科學としての經濟學は資料集聚の面と形式化の面とについてそれぞれ特殊な技法を發展せしめてきたものであるが、それはまた經濟史、經濟統計、經濟理論、經濟社會學等々の分野を成立せしめてきたものである。科學としての經濟學の發展を問題にするときは、われわれは廣くこれらの分野を見渡さなければならない。こうしてシュムペーターの『經濟分析の歷史』においては分析ということを廣く解して科學的＝分析的と考えて出發しているけれど、しかし全體として見ると、この分析という點をいわば蒸溜したものとしての理論に重點がおかれているように私には思える。たとえば科學的知識を tooled knowledge と解しながら、理論をとくに box of tools と呼んでいる言葉遣いを見ても、同じツールという語を廣い意味から直ちに狹い意味に移しているのであって、そこにおのずからシュムペーターの重點のおきどころが窺われると思う。さらに科學的・分析的な知識は資料面と形式面とをもつが、シュムペーターの論述を見ると、このうち形式面をとくに分析的と呼んでいる箇處が多く、しかもこういう分析的なものにそれ自體意味をもたせるのが理論であるとするのであるから、ここでも分析という同じ語を廣い意味から直ちに限定した意味に移しているのである。ツールや分析は最も純粹な形において理論のうちに見出されるとシュムペーターは解するのである。純粹なものは實際にはいろいろ他の要素によって取圍まれているであろう。そこにいま述べたような種々の分野を考慮する要求も出てくるのであるが、問題は單に雜然たる混在を指摘するにあるのではない。純粹な理論的分析の獨自の意義に焦點を向けることによって、他の經濟分析の諸分野の意味するところも明確にされるのである。

三　純粹理論としての經濟分析

そこで純粹理論としての經濟分析についてもう少し立入って考えて見よう。理論的な形式化が假設的な性格をもつことはすでに述べた。假設というのはもとより事實の說明に役立つものでなければならないが、しかも事實

を觀察する前に豫め構成されるものをいうのである。それは事實を全く離れて勝手につくられるものではない。前に述べた例でいうと、既製服が賣れなければならないと同樣、理論的形式化も結局は事實に訴えるものでなければならない。しかし歷史や統計においても含まれている假設と理論的假設とはどこが違うか。中世の都市經濟や近世の資本經濟という型を考えるのと、一般に完全競爭や獨占の型を考えるのとはどこが違うか。完全競爭において人々が價格を與えられたものとして受取り、そのもとに利潤の最大を求めるというのは論理的前提であって、時處的に制約されることではない。中世にもあったし、ヨーロッパ以外にもあった。このような前提が純粹には現われなかったというならば、そのことは資本主義の場合でもそうである。ただ人々が價格を受動的に受取り、利潤の最大を求めるということを前提すれば、その歸結として價格は限界費に一致するという命題が導かれる。かくの如きが理論分析の例であるが、われわれはその意義を如何に理解すべきであろうか。

シュムペーターによれば、それは要するに「一般化」generalization ということにある。經濟の作用の一般的意味を知らんためにそういう分析を行うのである。もちろん經驗的な經濟現象は極めてバラバラな個々の出來事として現われ、それぞれ政治的・自然的條件に支配されて特殊性をもっている。しかしそれと同時に、これら個別的・特殊的な現象の間に經濟そのものとして共通な側面も見出され、そこから一般的な意味を引き出していくことができる。個別的市場における個々の價格の決まり方の奥に、それらを通じて一般的な價格形成そのものを考えるのはそのためである。個々の所得の決まり方に對して、所得形成一般を考えるのもそのためである。さらに個々の景氣變動や國際貿易の出來事に對して、景氣變動一般とか國際貿易一般とかを考えるのも同じである。そういう一般的な諸關係から、さらにそれらが相互に交渉していることに注意が向けられ、そこにより高い抽象化によって競爭とか獨占とかいう一般的な體系が導かれるのである。こういう一般化は人間のいわば個々の出來事を通じて經濟の一般的意味なるものを想定し統一するところに求められるのであり、複雜なものを單純化

する思考節約にもとづくものであって、それが理論的形式化の作用なのである。シュムペーターの表現を引用すると、"……Experience teaches us that these individual occurrences have certain properties or aspects in common and that a tremendous economy of mental effort may be realized if we deal with these properties or aspects, and with the problems they raise, once and for all" (p. 16) といわれるのである。

経濟學における理論的一般化は固有の「分析道具」を發展せしめていった。逆にいえば固有の分析道具の發達を伴いながら理論的一般化が行われていった。これらの分析道具によって個々の經濟現象に通ずる共通的側面が引き出されていき、さらに一般化の程度が促進されていくのである。それは、單に個別的な價格形成や個別的な所得形成から價格形成一般又は所得形成一般に至るというばかりではない。たとえばはじめ消費者について「限界利用遞減の法則」というものが、考えられ、それが一般には財の量の増大に伴う限界評價の遞減を示すと解されると、消費者についてのみならず、生産者について生産要素の量の増大に對する同じような關係を認めることができ、そこに形式的に同一な「限界生産力遞減の法則」が展開されるようになる。さらに一般に量と量との間の遞減的もしくは遞増的な「函數關係」なるものが注目されると、もっと適用の範圍が擴まって、需要や供給についても、所得と消費との關係についても、そういう函數關係を使って解釋すべきことがわかる。また、たとえば價格形成について需要函數と供給函數との切り合う點を「均衡」と呼ぶが、それは一般的には與えられた條件のもとにおける「決定關係」を示すということができ、それは價格形成のみに限らない。消費者が一定の所得のもとに諸財の利用を計る場合にも、生産者が一定の資金のもとに諸生産要素の使用を計る場合にも、等しく均衡すなわち決定を求めるものと解釋してよい。國民所得の理論において貯蓄と投資との關係から所得水準の決定を考えるのも同じである。このように一般化のために經濟學に固有の分析道具が工夫され、これらが理論的な經濟分析の内容をなしていくのである。いまここでは一、二の

例を示したに過ぎないが、こういう分析道具としては、「限界分析」、「均衡分析」、「動態分析」、「巨視分析」等等多くのものを思い浮べることができ、同時にこれらの複雜な集成によって理論體系なるものが形成されていくわけである。

經濟學においてこういう理論體系は除々に形成されていった。シュムペーターによれば、體系的な集成はリチャード・カンティロンによって最初に自覺され、やがてレオン・ワルラスによって實際に意識的に企圖されたと、いう。シュムペーターの書物では、「純粹理論」もしくは「一般理論」のもとにこの種の理論分析の發展が論及されているが、概括的にいえば、第二編の古代から一七九〇年に至る時期においてはそれは極めて斷片的な形をとって現われ、第三編の一七九〇年から一八七〇年に至る時期においてやや體系を整え、第四編の一八七〇年から一九一四年に至る時期において體系の確立が達せられたことが指摘されている。これらの時期の區別、發展の解釋についてはいろいろ問題があるであろうが、いまここではそこまで立入ることはできない。

かくの如く理論的一般化というのは、經濟の一般的意味を考えて、個々の現象に含まれている共通面を抽象し、さらにそれらの關連を明らかにするものといわれるが、このような說明には多少誤解が伴い易い。個々のものから共通面を引き出すというよりは、個々のものを包攝していくといった方が、ここでの一般化の眞意に近いであろう。シュムペーターをやや離れるけれど、たとえば土地の面積を計算するのに、幾つかの三角形に分解すればよいというような原則を見出すことが一般化であって、これによっていろいろな地形を測量することができるのである。或る原則が個々の場合を包攝するということが一般化なのである。もちろん圓形の面積ということになると、多角形の邊の數を無限大にするという條件をいれて、原則の擴大を考えなければならないであろう。これはやや複雜している。包攝化といっても單に從屬的に關係づけていくのでなく、條件の分類によって並列的に關係づけていくことも必要になる。こうして個個の場合に應じて諸關係を體系的に擴げていくのが一般化である。

要するにここで極めて大切なことは、理論的一般化は

個々の場合を包攝していくものであるけれども、同時にそれは個々の場合の觀察に促されて發展していくものであることである。經濟學の例でいえば、景氣變動とか失業とか、そういう諸現象に直面して、それらをこれまで知られた關係のうちに包攝していくとか、もしくは一層廣い關係を求めてそのうちに包攝していくとかするのである。それには、常に個々の事態に直面し、これらを攝取していく努力が必要である。いままで一般的と考えられた條件が實は特殊なものと考えられ、これを含むところの一層一般的なものに移っていくというところに、理論的體系の發展があるのである。たとえばケインズは彼の著作を『一般理論』と名づけたが、その意味は古典派の經濟學が失業なき狀態を前提していたのに對し、一般的には失業が種々の程度において成立するという條件を考えねばならないというにある。そうすれば失業がなくなるのはそういう一般的條件の特殊の場合と考えられることになる。こういう例は經濟學のうちに幾らでもある。ケインズもまた或る點では特殊的であって、さらに一般化さるべきものをもっている。要するに經驗科學における理論的一般化は、經驗的觀察を押し進め、分析の努力を積み重ねて發展していくものであることを知らなければならない。

シュムペーターのいう理論經濟學の一般化も明らかに以上のごとく解さなければならない。一般化が動的のものであるからこそ、理論的分析の歷史というものも書かれるのである。前に述べた通り、科學的知識には資料面と形式面とが分かれるが、もともと兩者は互に關連し合いながら知識を促進していくものであり、理論は形式面に重點をおくとはいっても、根柢においては資料面と深く交渉し合うことを十分認めなければならない。同じ意味において理論と歷史や統計との關係もいろいろと考慮する必要があるし、さらに理論の內部での分析道具の對立や角遂もいろいろと問題になるのである。同時にこのことは理論的一般化ということをそれ自體として究明していくことを否定すべきではなく、ただそれが內部的・外部的な關係から常に動いていくことを認めなければならないのである。

四　經濟分析と經濟思想

以上によって經濟分析の廣狹二義を明らかにしたが、このような經濟分析に對してしばしば經濟思想というものが考えられている。經濟分析と經濟思想とは如何なる關係にあるのであろうか。これはシュムペーターの書物のいまとりあげている第一編においても重要な一問題を形成している。第一章の冒頭の句に、シュムペーターは經濟分析の歷史は「經濟思想のうちの分析的もしくは科學的な面の歷史」"the history of the analytic or scientific aspects of economic thought" (p. 3) であるといっている。分析もしくは科學を尊重するということももともと一つの思想であって、とくに近代思想に强く現われてきたことは疑いがない。ところでシュムペーター夫人がこの書の編集者として書いた序文のうちには、シュムペーターの意圖が「經濟分析の歷史であって經濟思想の歷史ではない」a history of economic analysis, not a history of economic thought (p. vii) という點が指摘されている。われわれはこの言葉も十分理解することができる。普通に人々は經濟學をポリティカル・エコノミーと名づけ、これによって經濟學は自由主義とか社會主義とかいう思想的立場をもたねばならぬと解している。シュムペーターによれば、科學としての經濟學はこういう思想的立場とは全く別箇のものである。もし科學ということを近代思想の一面であるというならば、それにはシュムペーターは反對しないが、もし自由主義とか社會主義とかいう思想的立場を經濟學の根柢にもたねばならぬことを思想と呼ぶならば、これは科學と思想との混同として排さねばならぬと、シュムペーターはいうのである。このポリティカル・エコノミーの考え方については第二章の第五節に批判があり、これによってわれわれはシュムペーターの眞意を十分汲みとることができる。

しかし問題はなお殘っている。科學の立場から思想的もしくは政治的な主義主張というものをいかに解するか。この問題は第四章において「經濟學の社會學」sociology of economics という甚だ魅惑的な題目のもとに展開されているところである。シュムペーターによれ

ば、思想的もしくは政治的な主義主張はこれまで經濟學に附着して論ぜられてきたが、問題を解明するためには、經濟學自體を一つの社會現象と見る視角においてとりあげねばならぬというのである。

思想的もしくは政治的立場を社會現象として分析することは、すでにはマルクスおよびエンゲルスによってイデオロギーと稱されたものである。理念として內面的に見たときはイデーであるが、同じことを社會現象として外面的に見たときはイデオロギーである。人々は何らかの思想的もしくは政治的立場を主張するが、それは實はもっと基本的な「土臺」において階級的利害というものをもっており、それを擁護するために派生した觀念的な「上層建築」がそういう主張となるのである。ところで人々は派生的なものを基本的なものと見誤り、「上層建築」を固執してそこから事實を解釋しようとする。これが「イデオロギー的偏見」ideological bias と呼ばれるものである。マルクスやエンゲルスが「ブルジョワ經濟學」と呼んで攻擊したものは、ブルジョワ的偏見にもとづいて構成された誤れる經濟學を指すのである。かくの如く「イデオロギー的偏見」を指摘することは科學的に十分意義のあることである。これによって當然科學的に正しい經濟學が求められねばならない。それはいうまでもなく一切のイデオロギー的偏見を離れることでなければならない。ところでマルクスやエンゲルスは一切のイデオロギーを離れることを求めず、正しいイデオロギーと正しからざるイデオロギーとを區別し、正しいものとしてプロレタリア・イデオロギーなるものを持ち出すのである。つまり始めはイデオロギー的偏見を一般的意味において語りながら、再びイデオロギーに立ち戻るのである。イデオロギーが觀念的な上層建築であるとした意味は多分に失われる。もしそうだとすると、分析そのものが內面的に正しいということと、むしろ外面的にイデオロギーが正しいということと、いわば二つの基準の分裂が生ずる。假にイデオロギーが正しいことを承認するとしても、正しいイデオロギーは必ず常に正しい分析と一致する保證のない限り、判定基準に矛盾をきたすことをまぬかれない。これについてシュムペーターは、"While Marx was so much alive to the ideological

character of systems of ideas with which he was not in sympathy, he was completely blind to the ideological elements present in his own" p. 36) という言葉でマルクスを批判している。

かくてわれわれが明らかにしなければならないのは、思想的立場もしくは政治的立場が正しいかどうかということではなく、それらが眞の經濟分析を促進したか阻害したかということでなければならない。シュムペーターが經濟思想史と區別して經濟分析史を考えるのはそのためである。經濟分析を中心とし、それが樣々な思想の起伏によって或は促進され或は阻害される事實を指摘するには、經濟分析そのものを社會現象と見る「經濟學の社會學」、一般的には「知識社會學」の問題として考察するのでなければならない。シュムペーターはアダム・スミス以來のいわゆる「システムス・オヴ・ポリティカル・エコノミー」という意味での經濟思想史に反對する。經濟思想史はむしろ社會現象の分析として論ぜられなければならない。

ところで、經濟分析と經濟思想との關連についてはいま一つの問題がある。前に述べた道り、經濟分析とイデオロギーとは區別されなければならないけれど、イデオロギーと似てもっと內面的に經濟分析と關連している或る知的作用があると、シュムペーターはいうのである。これはとくに「ヴィジョン」と呼ばれる。シュムペーターによれば、「ヴィジョン」とは「分析以前の知的作用」preanalytic cognitive act (p. 41) である。それは分析者のいだく「問題意識」というに近いであろうが、シュムペーターにおいては時代的・社會的環境によって問題意識が規定される點を重視し、これを特殊の語によって「ヴィジョン」と名づけたものと思われる。恐らくイデオロギーの問題を考察していくうちに、そこに政治立場の主張と區別して、別に經濟分析につながる知的作用の含まれていることを認め、したがってイデオロギーと切り離して「ヴィジョン」ということを指摘したのであろう。この「ヴィジョン」は分析につながるが、あくまで分析以前のものであり、分析者がおぼろげにいだく問題意識なのである。問題意識は經濟分析のうちに降りてきてはじめて分析的な知識になる。たとえばケインズは第

一次大戰後數ヶ年にわたって長期的失業に對する或るヴィジョンをいだいていたといえるが、長い思索の結果、ついに『一般理論』の出現によって、このヴィジョンが特定の分析道具で武裝されて經濟分析の舞臺に登場するに至ったのである。大切なことは理論的分析によってこれまでの理論を乘り越える成果を生み出すことである。「ヴィジョン」はただその契機になるに過ぎない。「ヴィジョン」が著しく活潑であっても、十分成果を生まないままに萎縮してしもうことがある。

シュムペーターの「ヴィジョン論」はたしかに注目してよい。問題意識をいだかずして分析も認識もあり得ないからである。その問題意識は時代的・社會的環境によって規定され、したがって社會改善の要求とも結びつくものと解してよい。ただ要求を直ちに正當化するのはイデオロギーであり、價値判斷である。科學的分析のなすべきことは、この種の要求の實現のための諸條件を現實分析のうちに探ることでなければならない。たとえば空を飛びたいという要求が正當のものであると論じても、それだけで空を飛べるわけではない。物理學的分析を押し進めて空を飛ぶ條件をさぐらなければならない。そこに分析を尊ぶ理由がある。分析の結果、はじめいだかれた要求が無理のものとわかれば、要求そのものも變更していくであろう。シュムペーターの分析以前の知的作用というもののなかにはこういう要求の作用も含めていいと私は解している。

五　經濟分析の歷史

私はここでもっぱら經濟分析の意義を明らかにするという視點からシュムペーターを紹介しているに過ぎない。書評としてならば、もっと全般にわたって論ずべき多くの問題をあげなければならないが、いま私の意圖はそこにはない。ただここで最後に、シュムペーターのこの書の第一編に關する限りにおいて、やや全般的にシュムペーターの所論を整理して見ることにしたい。

參考のため、東畑博士の邦譯にしたがって、第一編の目次をかかげておこう。

第一章　序論とプラン　一、本書のプラン——二、何故にわれわれは經濟學の歷史を研究するか——三、しかし經濟學は一個の科學であるか

第二章　間奏曲（一經濟分析の技術）　一、經濟史——二、統計——三、理論——四、經濟社會學——五、政治經濟學——六、應用諸分野

第三章　間奏曲（二他の諸科學における同時代的發展）　一、經濟學と社會學——二、論理學と心理學——三、經濟學と哲學

第四章　經濟學の社會學　一、經濟學の歷史はイデオロギーの歷史であるか——(a)「經濟法則」の特殊な性質——(b)イデオロギー的偏見のマルクス的解明——(c)經濟分析の歷史は政治經濟學の體系の歷史や經濟思想の歷史といかに異っているか——(d)科學的過程、ヴィジョンならびに研究手筈のルール——〔編集者の註によると、このあと二、科學的努力の動力と科學的發展の機構——三、科學一般殊に經濟學に從事するもの、の二節が續く豫定であった。〕

いうまでもなくシュムペーターの意圖は經濟分析そのものをではなく、經濟分析の歷史を書くことであった。ここでシュムペーターは大きく二つの觀點を分けているようである。一つは經濟分析そのものの內面的原理にもとづく發展、他は經濟分析に對する外面的諸契機の作用である。前者は廣く科學的方法ともまた狹く理論的方法とも解されるが、いずれにせよ、そこでは專門的技法が技法として次第に發展進步せしめられていく。後者の外面的諸契機にはさらに種々なるものがあげられるが、間接には經濟學以外の諸科學の發展（第三章にとりあげるもの）があり、直接には社會的環境にもとづく問題意識や人格的要素としての動機・學風・學派など（第四章にとりあげるもの）がある。この最後のものはシュムペーターによってとくに「經濟學の社會學」と呼ばれて詳論されているところであるが、一般的には「知識社會學」又は「科學社會學」Wissenssoziologie or Sociology of Science と名づくべきものである。この科學社會學と並べて、シュムペーターは別に、科學的方法一般をとり扱う「科學論」Wissenschaftslehre or Science of Sciences のあることを指摘しているが（p. 5, p. 33）、これについては詳論はない。第三章の諸科學の發展の問題も、シュムペーターにあっては、それらが經濟分析の自律的發展とそんなに深い交渉がなかったことを指摘するものであり、したがって私の見るところでは、この章もやはり——やや間接な形ではあるが——「經濟學の社會學」という見地から書かれていると思われる。かくて、シュ

ムペーターでは、總じて、經濟分析そのものの內面的發展と外面的諸契機とを分け、後者を經濟學の社會學としてとり扱うものであるということができる。經濟分析そのものではなく、經濟分析の歷史をとりあげるシュムペーターの方法論はここに見出される。

このことは經濟學の歷史を時代性というものに引っかけて理解しようとする通說と對決することになろう。あらゆる經濟學はそれぞれの時代の產物であるという單純な考え方は一般に受けいれられ易い。資本主義の發展期を適當に分けて經濟學の諸說を配屬したり、また今日の時代を背景として今日の經濟學がつくられると考えたりするのが、これである。そこでは時代が一切の判斷基準になる。時代が移れば、古い經濟學は新しい經濟學によっておきかえられねばならないとする。しかし時代的環境は經濟分析にとってあくまで外面的なものである。時代的環境によってヴィジョンというものが浮びあがるが、これもそれだけでは外面的契機に過ぎない。たとえば一八七〇年という時代は自由放任に疑惑をいだき、社會改造の要求の擡頭した時代であるが、ドイツ歷史派たちはこれを社會政策學會の設立という形でとりあげたものの、理論分析の方面では殆んど貢獻するところがなかった。同じ時代に、ジェヴォンズ、メンガー、ワルラスによってこれまでの古典派理論を乘り越える大きな革新がもたらされた。もちろん彼等も時代の雰圍氣から社會改造の問題に重大な關心をいだいたことは彼等の文獻から知ることができるが、理論的分析に關する限りにおいては、彼らはむしろ自由競爭を通じて經濟そのものの機能を鋭く究明し、社會改造といえども經濟の機能の正しい認識を缺いては行われないことを指摘した。ドイツ歷史派が時代的環境をいずれかといえば外面的にとりいれたのに對し、近代理論派の人々はそれを外面的契機として理論分析そのものの內面的革新をなしとげていった。しかもこれらの人々は相當の苦心をして新しい講座を開設し、古い地盤と激しく戰いながら學說の普及につとめたのであるから、この意味ではむしろ時代をつくっていたと見る方が正しい。これらの事情はシュムペーターの書物の第四編に極めて印象的にとりあげられているところであるが、われわれはこれによって時代が學說を規定

するという通説がいかに皮相のものであるかを學びとることができる。

もちろんこのことは時代の動きとか個々の出來事とかを輕視することではない。これらは契機として經濟分析を促す力であることは十分認められなければならない。しかし問題は經濟分析そのものが正しく押し進められたかどうかにあり、あくまで內面的意味においてその「進歩」を語り得るのでなければならない。廣く科學としては資料聚集の技法と形式化の技法とが進歩せしめられ、古いものが新しいものによって連續的におきかえられていくのであり、そこにシュムペーターのいわゆる「科學的理念の相續」filiation of scientific ideas (p. 6) というものが考えられるのである。理論的分析に限っていえば、前に述べた通り、特殊的なものを特殊的なものとして位置づけ、これらを包攝するより一般的なものが求められることによって、そこに進歩がもたらされる。要するに大切なことは、觀察の仕方や論理の運び方そのものに經濟分析の內面的進歩の基準を認め、その觀點から諸學說の成果を評價することである。もちろん歷史的には、經濟分析の內面的發展は具體的な姿においては決して一直線を描いて進んだのではない。そこにはいろいろ迂回もあり迷いもあり、餘計な粉飾もあり無駄な論爭もあった。しかもこれらのことは今日もなお——いろいろ違った形をとって——繰返えされているところである。シュムペーターが「經濟學の社會學」なるものをもち出すのはそのためである。われわれは經濟分析がこれまで學派や學風や時代的雰圍氣などによって或は阻害され或は促進された過程をも十分學ばなければならない。これは自分自身の經濟分析を押し進めるために必要だからである。シュムペーターの『經濟分析の歷史』はこれらの點について豐富な材料を提供し、われわれの思考を根柢からゆり動かす大きな力をもっている。（一橋大學教授）